

草木塔の心

藤巻 光司

「分け入っても分け入っても青い山」(山頭火句集「草木塔」)。
山頭火は現代の芭蕉と言われた人で、大正十四年に出家得度し托鉢僧になり旅をし、昭和十一年に大峠を越えて米沢市に入り田沢街道の草木塔を見ています。岩手県の平泉へと行く旅なのだが、自選句集に「草木塔」の表題をつけたのは何故だろう。「一仏成道 観見法界草木国土悉皆成仏」。山頭火は漂白の俳人と言われ、「草や木や生きて戻つて茂つている」と句を詠んでいるような事から「草木塔」としたのではないかと思われる。

草木供養塔の存在については、昭和二十九年、米沢市の舞踊家佐藤忠蔵氏が初めて「羽陽文化」の誌上で発表している。また、その年には北海道を襲った洞爺丸台風で風倒木となつた大量の樹木の霊を慰めるために、大雪山層雲峡に「樹霊碑」が建立されている。これは、その時から七百年も以前に北海道民やアイヌ民族に布教した日持上人の教えである「諸仏皆歡喜現無量神力」「草木国土悉皆成仏」の影響があつたのではないかと思われる。

米沢藩は慶長六年(一六一一年)十一月、白旗松の植林、木流しによる城下への薪供給、山林の保護に力を入れた。明暦三年(一六五七年)四月には藩内の山林を調査し、松、杉、雑木の良く育っている林を藩の「御林」として「御林守り」を置き管理させている。

その後元禄十二年(一六九九年)、元文四年(一七三九年)、寛保二年(一七四二年)、宝暦四年(一七五四年)と「御留林」を増やし山林を保護してきたが、安永二年(一七七三年)二月二十九日の江戸大火により桜田、麻布の上杉藩の両藩邸が類焼した際、その再建に多くの「御林」が使われた。現在の西置賜地方からは柱材二千二百本、板百五十間分、さらに米沢市の田沢地区の山からは藩の家老自らが藩士や地元民と一緒に津川、会津、津川、新潟港へ木材等を運んだ。そのような事が草木塔建立の要因となつた。

米沢市の花沢地区六部には草木供養塔の建立された安永九年(一七八年)より百二十四年も前に、高さ三層を超える巨大な塔があり、碑文に「草木国土皆悉成仏」の経文が見られた。全国六十六カ国を回教する六部の行人も、北海道住民やアイヌ民族も、田沢の人たちも、みな同じ思いだったようだ。

動物は、歩き、飛び、泳ぎ、音を出し話したり鳴いたりする。それは、草木には出来ない事だ。だが、草木なくして動物は生きていけない。鳥や虫や魚も。だから、草木国土悉皆成仏と釈迦如来の教えとして法華経に示してあるのだ。また、世界各国に見られる「御神木」の樹霊信仰と相まって、草木供養塔が安永九年建立の二基から

吾妻山系の小樽川、綱木川、刈安川、梓川沿い、さらに犬川沿いに建立され、その五十年ほど後に飯豊山系の白川沿い木流しの行われたところに建立された。草木塔は類似塔も含めると現在、県内に百二十二基、置賜地方だけで九十基ある。このうち藩政時代に建立されたものは米沢市内に十七基、川西町に十一基、飯豊町に五基、南陽市に二基があり、発祥の地の田沢地区には十基ある。

二十世紀の後期には高度経済成長と共に地球の資源や環境に変化が起こり、酸性雨による樹木の枯死、生物への悪影響等が目立つようになり、自然保護が叫ばれるようになった。人類で初めて宇宙を飛んだガガーリンは「地球は青かった」と言った。水や緑の大切さが見直され、草木塔にも関心が向けられるようになった。草木供養塔が建立された原点に帰り、計画的に植樹、手入れをし、自然と人が共生できる行政が必要となる。

置賜は くにのまほろば 菜種咲き
青葉しげりて 雪山も見ゆ

結城哀草果詠

明治十一年七月、置賜を通ったイギリスの女性旅行家イザベラ・バードが「日本奥地紀行」で置賜を「アジアのアルカディア(桃浜郷)」と賞賛している。この自然豊かな故郷を守り、次世代に渡すのが我々の使命である。

(米沢市東二丁目一十四)